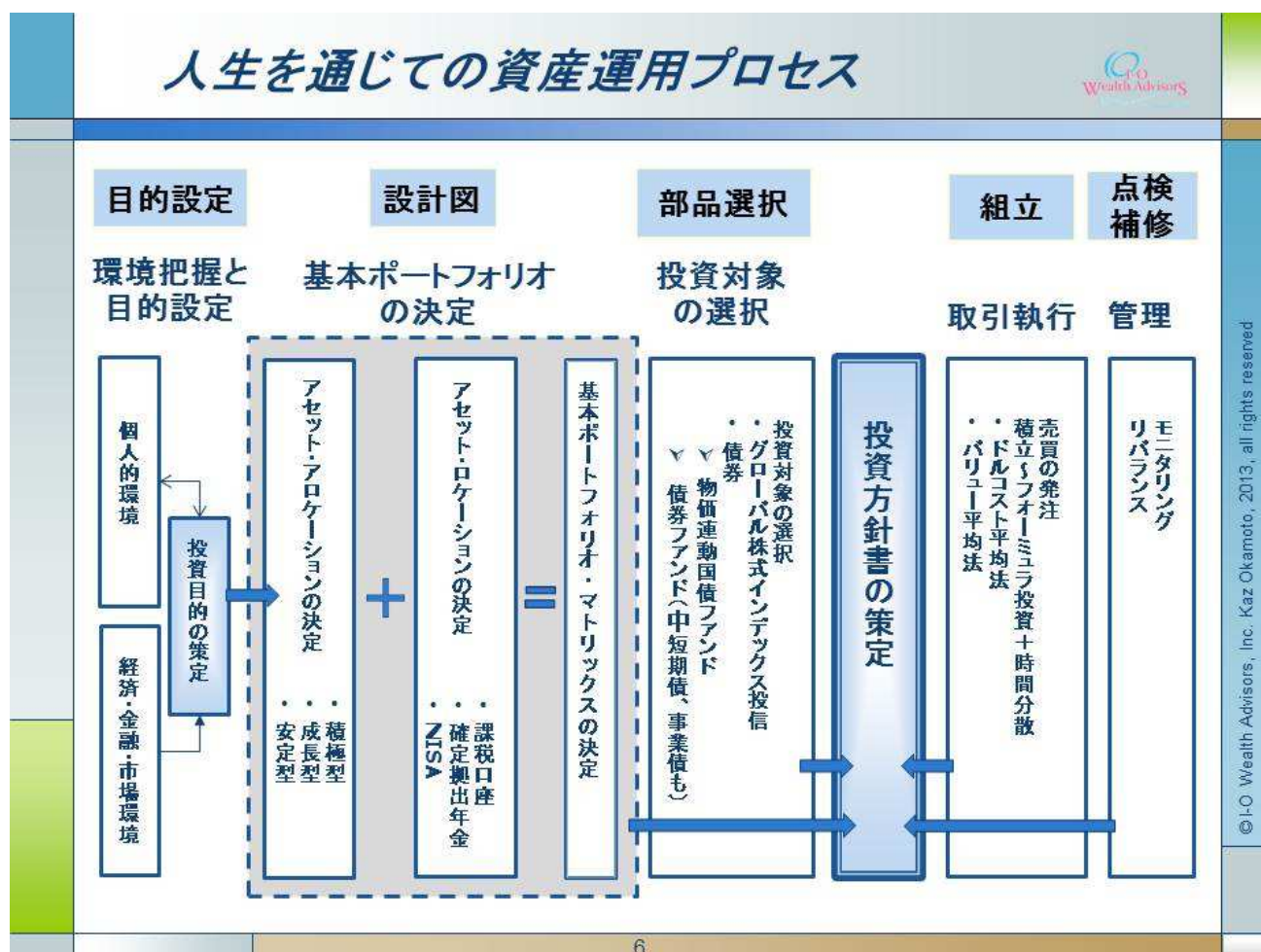




I-OWA マンスリー・セミナー講演より 資産運用のプロセス

講演:岡本 和久、レポーター:赤堀 薫里

私の基本的な資産運用のプロセスの考え方を紹介します。まず環境を把握した上で目的を設定する。例えば、各個人ごと、世代、性格、収入、その収入にも安定があるのかといったような「個人的な環境」があります。一方「経済・金融・市場環境」もあります。これらを統合した形で投資目的を策定します。ただ、「経済・金融・市場環境」は、自分の都合で変えられないが、「個人的な環境」はある程度、調整できる為、そこでどういう風に折り合いをつけるのか、それが投資目的になっていくわけです。



投資目的が決まれば、次はその投資目的を実現する為に、どのような基本ポートフォリオを選ぶ



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

のかという設計図の策定の段階に入ります。一つはアセットアロケーションの決定。積極型(株式 8 割・債券 2 割)・成長型(株式 5 割・債券 5 割)・安定型(株式 2 割・債券 8 割)という基本的な形を参考までに出しています。そして、それぞれの資産クラスをどの口座で買うのがいいかという、アセットロケーションの決定。アロケーションとロケーションのマトリックスによって、基本ポートフォリオのマトリックスが決まります。現預金については、生活費や緊急用の費用や、割合、短期的に予定される大きな支出を、定期預金や普通預金に入れておけばいいでしょう。それ以外の部分は、債券や株式になります。

株式について、初心者の方はグローバルな株式インデックス投信を持っていればいいでしょう。出来るだけ質が高く、コストの安いグローバルな株式インデックス投信。ETFのように1銘柄で全部買えるというものが一番いいのですが、日本の投信ではそうはいきません。大まかに言えば 1(日本株):8(日本以外の先進国):1(新興国)ぐらいの配分比率でそれぞれのインデックス・ファンドを持っておけばいいでしょう。



出典	期間	国	対象	リターン 名目	実質	R.P. 名目	実質
JS	1802-2006	US	8	8	3.5	3.3	
DMS	1900-2000	W	9	9		4.6	
		J	12	12		6.2	
	1950-2000	W				5.3	
V	1926-2006					5.9	
I	1969-2006				5.3	5.1	
	1951-						

債券の部分は、債券のファンドを保有します。債券市場はかなり低金利になっているので基本的には中短期債。国債だけでなく事業債というように幅広く持つ方がいいでしょう。それらを組み込んだファンドを積み立てる。今後、金利が上昇することがあっても短期の債券が中心のファンドであれば償還金を再投資することである程度、金利上昇に追いついていくことができます。また、予想以上のインフレに備えて物価連動国債のファンドも良いと思います。このように投資対象の選択をしていきます。基本ポートフォリオが設計図だとすれば、投資対象の選択は、設計図を基にした部品の選択になります。

部品の組立の方法も含めて投資方針書を策定します。年金の運用では必ずこれを行うのですが、個人ではほとんどの人が行なっていません。しかし、絶対にやった方がいい。投資方針書に従ってポートフォリオの構築をします。選択した銘柄を買付、組立てていく。ピンポイントでいつ買い、いつ売ればいいのかというのはなかなかわかりません。また、現実的に資産形成は、給料の一部を投資に回していく為、自然に積立投資になるでしょう。積立投資によって買付タイミングの時間分散を計っていきます。「大きく下がった時に買う。等株数で買っていく。」と、いう方法も考えられますが、一般的には定時定額で時間分散を図る「ドルコスト平均法」が一番、手間もかからず初心者向けには最適と言えるでしょう。さらに、もう一歩進んで「バリュート平均法」というような積立方法もあります。組立が終われば点検・補修の作業となり、モニタリング・リバランスをすることになります。これが大まかな資産運用のプロセスです。